



TITLE:

花山だより

AUTHOR(S):

CITATION:

花山だより. 天界 1930, 10(114): 358-358

ISSUE DATE:

1930-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161573>

RIGHT:

◇第八回◇ 七月一日午後四時より 花山天文台に於て

座長 山本教授 司會

中村要氏 : Schwassmann-Wschmann 彗星に屬する流星群に就て

逸早く京都大學より全世界にその出現を報ぜられたシワスマン彗星に附屬せる流星は花山天文臺員總出で觀測された。既に5月21日に之に屬すると覺しき流星群が出現した。中村氏によると流星はすべて弱光度で、4等乃至それ以下であつた。

山本教授は宮澤氏の觀測を報ぜられたが、甚しき時は1時間に100の多き割合に上つてゐる由である。

中村要氏 ; 11糎の寫眞玉

望遠鏡の權威中村氏の努力になつた十一糎の寫眞玉を見せて戴く。

上島昇氏 : On the Uniformity of the composition of stellar atmosphere

ミルンの“Generalized Saha formula”とラツセルの“Rowland intensity scale”とを組合して太陽, α Ori, α Sco, α Boo, γ Cyg α Per, α Can mi, 2 Can. ma の八個の星の大氣中の種々の原素の定量分析をして見た。それによると、どの星の大氣の組成も大差ないらしい。

花 山 だ よ り

九月に入つて、休暇歸省中の人々も歸山せられ、それに新しい人の顔も二三増して、相變らず賑やかです。高城氏は志願助手より正式のメンバーとなられ、又、宮井君が時計係の雇員として來られました。夏期中滞在せられた人々のうち、最後の金森氏は九月四日下山されましたが、西女史のみは、夏を過ぎても、引きつゞき天文臺で研究をせられることになりました。

四十六糎が愈々完成しました極軸にローラーが付け加へられたので、運動は輕過ぎるほど輕くなり、接眼部には大規模な寫眞撮影裝置が施され、又、そこには獨特新案の單式移動取枠が付けられたので、もはや此の上の慾はありません。すぐ、エロスと超海王星と、微光の小遊星と彗星との觀測が始められませう。又、いよいよ日本製の星雲寫眞が撮れることになつたわけです。柴田君の25センチ F3 鏡も程なく完成する豫定です。